

特集 1

「個性」を大きく 発芽させる為に

個性重視の時代に、100人100様のピアノ指導を



「個性豊かな演奏」「個性あふれる演奏」という言葉をよく耳にします。特に国際コンクール等では、自己主張の強い演奏を目の当たりにして、驚くことも少なからずあります。しかし「個性」を意識しすぎるあまり、自己中心的な演奏に陥ってしまうケースも少なくありません。「個性豊かな演奏」と自己中心的な演奏は、紙一重といっても過言ではないのです。では、「個性」をどのように捉えて指導をしていけばよいのでしょうか。個性とは「アイデンティティ」つまり、その人固有の特性、あるいは

はその根拠と定義されます。つまり「その人の人間性や考え方があらわれる演奏」というのが、「個性ある演奏」といえるでしょう。そこに導く為に、どのような教育をすればよいのでしょうか。

クラシック音楽という枠の中で、最大限個性を発揮するために、ここで「個性とは何か」をあらためて検証いたしました。ふと立ち止まって考えるきっかけにして頂ければ幸いです。

1. 「個性」って何ですか？

～対話式レッスンで、自ら考える生徒を育てる

「個性ある演奏」とは、その人の思考がある演奏です。「個性的な演奏」を求めるのではなく、楽曲に対する丁寧なアプローチ、あるいは音楽に対する興味や表現意欲、それが少しずつ醸成されて個性になるのです。

「他人と違う＝個性」ではない

水村 浩一先生（当協会評議員）

構成上の特徴をいかに考え、表現に結び付けるか

個性とは他人と違うもの、という捉え方が一般的と思いますが、では他人と違えば個性のある演奏といえるのでしょうか。フォルテの部分ピアノ表現すれば個性的でしょうか。これはいささか違うように思います。その部分がなぜフォルテなのか、なぜピアノではないのか、これは楽曲の構成上から来る理由です。

問題は、演奏者がこの構成上の特徴をどれだけ考え、理解し、感じて表現に結び付けているかが重要なのです。もしも、フォルテと書いてあるから強く、と単純に音を出すようならば、「では、どのくらいの強さで弾けばいいのでしょうか？」とたずねたくなりますね。これに対して、演奏者が自らの感覚と思考力で、何らかの回答を出し、それが鍵盤上で表現できたとき、「個性」といえるのではないのでしょうか。

自らの意思で音色を生み出す能力

私たち指導者は、音楽をつくり上げる大切な要素、ポイントを生徒に気づかせてあげること、そして表現のためのヒントを与えてあげることが大



切です。それによって演奏者に、自らの意思でリズムやダイナミズム、フレーズ、音色などを生み出す能力が開発され、定着します。他人のことを鵜呑みにせず、自分自身で考えること。でも、これができるようになるためには、音楽に対する分析力をベースとした、指導者の適切なヒント、示唆が大切だと思います。

個性豊かな生徒は、自分で考え、感じる力が備わっているので、楽曲中のある個所について、「なぜそんな弾き方をするのですか」と指摘したとき、自分で気づかなかったことならばすぐに反応して考え、また前後関係から見て不自然な表現だと感じれば、すぐに修正するなど、自分の音楽

の主体性を失うことはありません。

個性とは「耳、心、能力」の結集

山内 るり先生（当協会評議員）

教わった事から自分の感性を広げる

「バラだけが花ではない、ユリも小さなパンジーも皆それぞれ美しい。あなたも素敵な花ですから、綺麗に咲いてね」

顔や声が違うように、子供は皆違う個性をもっています。同じ楽譜を同じピアノで弾いても、一



人一人異なります。つまり性格や体格、環境、フレーズ感、リズム感、息遣いまでも含めて、すべてを包括した人間性が表れてきます。

達者に弾けるというだけでは個性ある演奏とはいえません。話術でも流暢にしゃべれる人が立派だとは限らず、朴訥な話し方でも結構人の心をとらえる場合が多くあります。

芸術は感動の伝達ですから、美術や書道などと同じく、みな人の心を感動させてこそ値打ちがあります。教わったところから自分の感性を広げて、独自の表現ができることが望まれますね。

自然な演奏には、技術と感性が必要

その人らしい自然な演奏を一番の目的にしていますが、そのためにはテクニックも重要ですし、感性も磨かねばなりません。指の独立のためには、練習が必要です。苦しめることなく練習が好きな人間にするためにはどうしてやればよい

か、というのが私の課題と心得ています。

年齢に関わらず、心の触れ合いを

幼くても大きくても、心のふれあいが大切ですので、常に同じ目線で話をするよう努めています。次に毎回のレッスン時、必ず良いところを見つけて褒めてあげます。その時、「どこが、どうであったから良かったのか」を分かりやすく説明して、そこから自信を持ち、イメージを膨らませてくれることを願っています。

また褒めた後、直したいところを注意しますが、本人の真似をして、他の弾き方をして聴き比べさせ、納得させた後、もう一度弾かせて理解したことを確認して宿題にします。

よい耳を持ち、柔軟な心、豊かな発想、きらりと光るひらめきを、身についた優れたテクニックで自然に演奏表現する能力が理想です。

表現意欲を持った人が十人弾けば、十通りの「個性が」生まれる

國谷 尊之先生（演奏研究委員会副委員長）



コンペティションやステップで審査する時、特に「個性的か否か」は気にすることがありません。なぜなら、魅力的な演奏は、つねに「個性的」だからです。

言葉は、その概念が一人歩きすると誤解のもとになりますが、「個性的」という言葉も慎重に扱う必要があると感じます。時には作曲者の意図をかえりみない演奏、たとえば強引なテンポ設定や、和声とかみ合わない強弱の設定などを「個性的」と言うこともあるでしょう。これでは「個性」という言葉がとても狭い枠の中に閉じ込められてしまいますが、本来「個性」とはそんなものではないはずです。

ピアノという楽器には弾く人によって違う音色を出す多様さがありますし、曲にもそれぞれの性格があります。作品に対する表現意欲を持った人が十人弾けば、当然そこには十通りの「個性」が生まれる…。まさにこれがピアノの魅力の大きな部分を占めていると思うのです。

バロック作品の演奏で鮮やかな個性に出会ったときなど、はっとさせられます。たとえば転調の瞬間など、ある人が強音で、また別の人は弱音でそれを表現し、そのどちらも説得力があるというケースは十分ありうる、いやむしろ全く当たり前のことだと思います。表現意欲を持たないまま、強弱の変化、アーティキュレーションなど、外から与えられた情報を自分で味わうことなく弾いただけでは、聴き手の胸を打つのは難しいと思います。

作品からメロディー、リズム、ハーモニーといった音楽の諸要素を読み取り、喜びをもって感じる事ができれば、だれでも個性的で魅力ある表現ができるはずですが、実際はこのことが難しいのだと思います。そう考えると、たとえばソルフェージュやアナリーゼなどの学習が持つ比重は大きいかもしれません。また最近思うのは、個性を磨くための素晴らしいテキストは、なんと言ってもJ.S. バッハの作品ではないか、ということです。まさに無限の表現可能性がその作品の中に含まれているのです。

2. 個性は、 基礎の上に成り立つ

～「型にはめる」のではなく、「型を知る」～

基礎という土台が出来て初めて、人に受け入れられる個性が発揮できます。基礎をつける段階では、「型」を知ることが重要。型とは「はめる」ものではなく、クラシック音楽とは何かを「知る」一つのきっかけ。つまり、自分なりの演奏に至るまでの一過程と捉えることが重要です。

思いを伝えるための技術

松尾 英美先生（当協会正会員）

いつの時代も、子供は個性豊かです。しかしその思いがピアノの演奏に反映されないとしたら、それは気持ちを伝える奏法、すなわちテクニックが身につけていないということです。個人差はありますが少なくとも中～高校生までは基礎をしっかり固めることを重視します。

ショパンにはショパンの個性、ベートーヴェンにはベートーヴェンの強烈な個性があります。奏者の個性が、作曲家の個性を上回ることはいくらでも過言ではありません。ですから、意図的に奏者が自分の「個性」を出そうとするのは、本質的ではないと思います。

しかし、奏者が持っている感性を作品の個性に付加させて、相乗効果を生むことはできます。そのために、作曲家をよく学び、その作曲の背景にある痛みや喜びを知ることが大切です。例えばモーツァルトをより深く理解するためオペラに、その他バレエ、展覧会等々「ピアノの練習を休んでも観に行くように」勧めています。作曲者の心の内を深く感じ取る心を養うことで、曲の持つ精神の高さを損なわずに個性的な表現ができると思います。



テクニックをつけながら、音楽表現へのアプローチを

伊藤 裕子先生（当協会正会員）

個性豊かな音楽とは、理性的に自由に表現できることだと思います。そのために、まず楽曲構成を教えて、楽譜に何がどのように書かれているかを説明し、アナリーゼします。アナリーゼされた音楽をどのように表現するかは、生徒個人の考え、感じ方次第ですが、指導者が助言することで、二人三脚で音楽をつくり上げていきます。

その前提として、基礎力、すなわちテクニックと音楽性が必要です。ハノンやレガート、スタッカート、マルカートで弾くことによって、実際の演奏のアプローチともなり、音階や半音階の反進行フォルテ、ピアノの練習や移調、リズム変奏等によって練習的にも用いられ、楽譜の応用によって効果があります。またチェルニーは指の運動だけでなく、音楽表現へのアプローチとなり、音楽表現のためのテクニックを身に付けるのに役立ちます。積極的に練習をしない生徒さんには、伴奏をつけて連弾をしたり、フロッピーを使ったり、CDを聴かせて興味を持つよう工夫します。

音楽には「絶対にこうでなければならない」という決まりはありません。その形のないものをつくり上げていくところに、個性の表現があります。



重要なことは、演奏者自身がユニークであるということではなく、いつも聞く人の心に寄り添ってくような自在な音楽になっていることでしょう。

自由な表現をするために、時代様式を踏まえる

杉谷 昭子先生（当協会演奏研究委員・国際委員）

個性的な音楽と自己中心的な音楽の違いは、指導者が時代様式をどれだけ心得ているか、にも起因します。例えば日本ではレガート奏法が高く評価されがちですが、ノン・レガートで弾いてもバロックの精神性に則っていれば、認められるべきでしょう。つまり時代様式に則った奏法を尊重すれば問題はないのです。この自由性を許すには、指導者側



の勉強も必要になります。

また日本ではテクニック偏重主義に陥りがちですが、一つテクニック教えるのでも、それは「どういう音楽をしたいか」に基づいてなくてはなりません。肩からのテクニック、腕や手首、指の使い方はいいのに、体全体で肩から下を関係づけられていないテクニックが、よく日本で見受けられます。ですから傾向としてきつい音で和声感のない固い音になってしまいます。第一関節をよく意識して、指のお腹を主流とする海外のピアノストの弾き方を取り入れていく必要があるでしょう。

ハイドン、スカルラッティ、モーツァルト、シューベルト、ショパン、ドビュッシー、ラヴェルといった、軽い音が美しい作曲家の曲は、ハーフタッチ、ハーフペダルが海外では主流です。きちんとした様式感を踏まえていれば、こうした奏法に対して「打鍵が浅い」といった評価にはならないと思います。

ピティナっ子の個性 1 ～個性は変化する

二本柳奈津子先生（当協会正会員）
小塩真愛さん（2003 年度コンペ E 級金賞）



小塩真愛さん（中 1・2003 年度 E 級金賞）は 4 歳の時から教えています。A 1 級・B 級の頃から指が

動いたので、速いテンポで弾くことに達成感を感じていたのですが、C 級から音色の変化を意識し始めるようになりました。以前から大胆な表現には抵抗を感じるようですが、繊細な表現や響きを丁寧に作り上げる事は得意です。

今年のコンペではそんな彼女の良さが出る曲をと思い、バロックはバッハの平均率から 3 つほど提案しました。その中で Fis dur の曲が彼女の明るい音質にぴったり合いましたので、2 巻の 13 番に決めました。実際ホールの響きとも合い、硬質ではない明るい音が出せたように思います。また古典はベートーヴェン、ロマン派はシューベルトを選びましたが、どちらもソナタの楽章抜粋でしたので、違う曲に変更するか迷いました。しかし、レッスンの休憩時間にベートーヴェンを弾いていた時の様子が、とても楽しそうでしたので、結局ベートーヴェンに落ち着きました。もとかからお気に入りの曲だったの

で、結果的には一番気持ちよく弾けたようですね。

コンペティション期間中も、なるべく他の曲も練習させるようにして、レパートリーを増やしてきました。彼女の場合、小さい頃から四期のバランスが比較的良い方ですが、それが長所でも短所でもあります。「個性」という点では、まだ模索中です。これからさらに多くの曲と出会う中で、可能性を広げ、自分の個性を自覚するように導いていきたいと思っています。現在はリストの「ハンガリー狂詩曲」、ショパンのスケルツォ、ドビュッシーの「版画」等に取り組んでいます。

個性は変化するものだと思います。ですから、例えば「歌う曲が得意だから」と周りが決め付けて、そればかり練習させるのは良いとは思えません。指導者としては、生徒の状況を鋭く観察し、その時々合った曲が提案できればと思います。



3. 先生の問いかけで、個性は目覚める

～観察者であれ！生徒の「気づき」をサポート

子供の個性は不変ではありません。その成長の過程で、外からの刺激や自らの気づきによって、「個性」が芽生え、育っていきます。指導者はその微細な変化を見逃さず、サポートすることが求められています。

曲が個性を育てる

小原 祥代先生（当協会正会員）

生徒の個性は変化します。小学校時代に近現代曲を好んでいた生徒がおり、「この子はリズムの面白さを感じる方で、歌う曲はどちらかといえば苦手かな？」



と思っていました。しかし、高校生になってから突然ロマン派が好きになったのです。この生徒は、中学校から高校1年生までバスケット部に所属して、毎日非常に厳しい練習を続けており、その間ピアノも中断していました。しかし、部活をやめてしばらくしてピアノを再開してから、精神的に安定感が戻ってきたのでしょうか、がらっと趣向が変わりました。ショパン等の叙情的な曲に魅力を感じるようになったようです。

本人を取り巻く環境、発達する感性、そして曲との出会い。それらが偶然にもそれまでに気づかなかった個性に目覚めたのでしょうか。ですから指導にあたっては「この子はこれが得意、これが苦手」と決め付けず、偏らないように色々な作曲家の曲を弾かせるようにしています。普段は自主性を育てるために、なるべく生徒本人に「どの作曲家が弾きたい？」と聞き、3曲ほど提案した中から選んでもらうようにしています。

個性を発揮する為には、まず生徒の意欲を引き出すことも大切です。以前知り合いの作曲家に

新譜を頂いたことがありました。それは小学校レベルの曲で、日本的なメロディながら新鮮なリズムで構成されている作品でしたが、芸術性の高い曲でしたので、生徒達は興味を持って弾いたようです。内容の濃い作品にはきちんと反応してくれますので、常に慎重に考えて曲を提案するようにしています。

「真似ることは学ぶ第一歩」

西尾 学先生（当協会正会員・知多南ステーション代表）

広辞苑で「学ぶ」を調べてみますと、「①まねてする、ならって行う。②教えるを受ける、業を受ける ③学問をする」とあります。初歩のレッスンは「真似る事」



から始まります。一つの演奏パターンを習得するという意味で、「真似ること」も必要だと思います。例えば3拍子の曲を与えても、ワルツのリズムを感じてもらえない場合、まず私がその曲、そして類似の曲を弾いて聞かせます。そして音楽様式、時代背景についても話します。その上で楽曲をどう演奏したらよいか、考える力を養っていかねればなりません。ある程度曲が仕上がった段階で、CDを聞き比べたりしながら、自分にとって最もよいと思える演奏パターンを見つけてもらいます。

指導者はどんな小さな生徒にも、「自分だったらこんな風に弾きたい」という気持ちを育てる必要があります。1つの楽曲にもいくつかの弾き方

がありますので、指導者としては、そのレパートリーを普段から研究しておくことも重要ですね。また楽譜も次々新しい曲集が出てきていますので、空き時間には新譜コーナーを覗いて研究したりしています。

「学びて思わざれば則ちくらし」(論語)です。「真似」した後で、どれだけ自分で考えさせることができるか、これは課題です。すぐにはできませんので、長い目で見て自然に積み重ねていければと思います。

「何か感じずには いられない」状況 をつくる



丹内 真弓先生 (当協会正会員)

個性とは「色々な情報や経験から、自分の考えをまとめ、表現する力」だと思います。ですから普段のレッスンでも、生徒自身が何かを感じずにはいられない状況を作ります。例えばハノンを弾く時、ドタバタという音を出す生徒がいたとしましょう。その場合、じっくりくる音色を感じ取ってもらうために、横でおだやかな伴奏をつけてあげたりします。そうすると伴奏の響きにしだいに調和してきたりします。この過程から「静かな図書館では、大声で叫んではいけない」というような、空気を察知する力、つまり想像力が出てきます。こちらの伴奏も想像力豊かに、その日によってそよかぜ風だったり、ひだまり風だったり、ボサノバにもなるし、スイングもします。

また、「私はこう思うけど、あなたはどうか? どう感じますか?」と、考えてもらう間を大切にしています。生徒自身で自分の弾きたいイメージを掴み、その上で自由な発想を手助けしてあげられるよう心がけています。

ピティナっ子の個性 2 ～個性を受け止める

中島昌子先生 (当協会課題曲選定委員)

三葛朋子さん (2003 年度アミューズ部門 A 優秀賞)



「教育」とは文字通り「教え込む」ばかりではなく、「育てる」ことでもあります。決して慌てず、型にはめないことを前提としたいですね。このことを常に意識して、注意を与える時は「これは今、その子に大切なことなのか、それとも単なる指導者の押し付けなのか」と、見極めるようにしています。

今年アミューズ部門 A カテゴリーで優秀賞を受賞した三葛朋子さんを、小学校 3 年生の頃から指導しております。ユーモアがあり面白い事を言うのが好きな子で、人前で弾くのも自然に楽しめるタイプでした。コンペも自分から意欲的に参加し、ソロでは G 級までほとんどの級を受け、デュオでは奨励賞を頂いたりしましたが、その後アミューズ部門に参加するようになりました (2002 年度はアカデミック部門優秀賞)。

子供の頃から正義感の強い子でしたので、正しいと思う事は「権威」に立ち向かって物をいうところもありました。曲や演奏にもはっきりした好みがあり、大人の演奏批評もしていました。大学を選ぶ時は少し時間がかかりましたが、最終的には彼女の

個性を受け入れて下さる先生につくことができました。

年齢を経るにしたがって、曲や演奏を多く知るようになり、自分自身の音楽の作り方にも広がりが出てきたように思います。彼女の弾くピアノは、このところ人の心をとても落ち着かせるような、優しい気持ちにさせるような音楽になってきました。独特のユーモアや生来の優しさが、音楽上に花開いて来つつあるのだと思います。

ピアノ指導者として、生徒一人一人の興味のある部分は何かを観察したいと思います。具体的には様々なジャンルや形態の音楽を聴かせ、作曲家、演奏家の伝えたいことは何か、感想や意見を交換したり、発表会やコンペティションなど、人前で自分をどう表現するかを体験させるようにしています。そうすると、自然に各生徒の特性が表れてくるので、レッスンのペースや曲目・メソッド選びが決まってきます。



2 年連続でアミューズ部門
で上位入賞の三葛朋子さん

4. イマジネーションを広げて 「個性」の枝葉を伸ばす

～生徒の想像力を膨らませる為に

子供の個性は様々な伸びてゆく可能性を秘めています。その道筋を決め付けるのではなく、広げてあげることが大切です。先生が豊かな発想力を持って、多くの選択肢を提示してあげることが、子供のイマジネーションを刺激することになるでしょう。

何種類もの音楽があることを、演奏で伝える

奥村 真先生（当協会正会員）

個性とは「創造」だと考えます。そのために、まず生徒自らが「歌いたい、楽しみたい」という気持ちを持てるように努めています。教材は舞曲などのリズムに乗りやすいものと、音楽的な旋律を持つ教材を用意し、目の前で何度も弾いてあげます。その時1種類だけではなく、何種類もの音楽が存在することを演奏によって伝え、答えが無数にあることを認知させます。またそこから関連した名曲を取り上げ、子供達が将来弾きたい夢の1曲を持てるよう努力します。もちろん私自身のピアノだけでなく、CDを聞かせたり、消極的な生徒に対しては歌ったり踊ったりして、じっくり時間をかけて興味を持たせるようにしています。

その上で、脱力を習得させます。これは私自身も生徒も最大の苦痛を味わいますが、しかしこれができなければ「音楽的に」「良質の音」では弾けないでしょう。逆にここまでできれば、楽譜の良い読み方さえ分かっているならば、本人なりの音楽が自然と出てくるようです。

1回目のレッスンが最も素直な音楽になっている場合が多いので、それを原点として曲をつくり上げるようにしています。



メヌエットなら舞踏の映像を見せ、想像力を刺激

村上 隆先生（当協会フェスティバル実行委員）

最近の子供は、環境がデジタル化しているせいか、「0か1か」という思考法になっているようです。つまり、できない、あるいは厳しければすぐやめるというケースが多いですね。ですからまずは、音楽が好きだという気持ちを醸成させることが重要です。楽しみ方を覚えさせると「脳が開かれた状態」になり、発想、想像力が豊かになります。最近はいさい子だけではなく、大きい生徒も受け身な子が多いので、やはりそうした「右脳」を刺激するような配慮は必要です。

そのためには言葉やお手本の演奏を示すだけでなく、できるだけイメージで伝えるように心がけています。例えばメヌエットなら、実際に踊っているビデオを見せたり、オーケストラの演奏を聞かせたりしながら想像力を刺激し、表情、強弱、アーティキュレーションの工夫をします。「こう弾くように」ではなく、「どうすると、どんな風になるか」を考えさせるように方向づけます。あまり音楽的でない生徒に対しては、きちっとした演奏だけではなく、サンソン・フランソワのような表情豊かな演奏のCDを聴かせたりしています。そうして目で見えない表現上の幅を広げていけるよう、手助けできればと思います。



個性を磨く環境～“総合的学習の時間”のモデル校

玉川学園



「自由研究」が文部科学省のモデルに

玉川学園(東京都町田市)のキャンパスは、幼稚園から小・中・高・大学までが揃っているまさにミニ学園都市である。実は、現在公立学校で取り組まれている総合的学習の時間は、ここで実践されている「自由研究」の時間がモデルとなっていると聞いて、今回の訪問となった。これは小学部高学年(4～6年生)以上が対象のカリキュラムで、吹奏楽や美術、算数、理科実験、手芸、パソコン、歴史研究等、目的別17のクラスに分かれて自由に作業する時間である。今回はそのクラスを見学させて頂いた。

自由研究は毎週火曜日の午後。自分の好きなテーマに基づいて研究、作業できる時間なので、皆生き生きとした表情だ。熱心に作業を続ける児童の間を、先生が時折アドバイスしながら歩く。

この日は吹奏楽とハンドベルの演奏を聞かせて頂いたが、練習始めてまもないとは思えぬほど呼吸の合った演奏。身近に玉川学園オーケストラというお手本が存在する為か、水準の高さを感じさせる。小中高大に至るまで、一貫した学習環境を享受できる強みを感じた。

高い専門性と使命感に裏付けされた教育

実は自由研究以外にも、特筆すべき制度がある。その一つが、小学部高学年からの教科担任制。公立では中学校から導入されている制度だが、ここでは小学部の先生が特定教科の担当とクラスの受け持ちをしている。小学生の段階から教師一人一人が「その教科のプロフェッショナル」として尊重され、プライドを持って指導されている訳だ。

校舎の構造もそれに合わせてユニークかつ機能的。例えば各教室には「〇年△組」/「社会」の教室といったプレートが貼ってあるが、生徒は国語の時間になれば国語の部屋に行き、ホームルームの時間に自分のクラスに戻るといった具合に、教室は2つの目的で使われる。先生が移動するのではなく、児童が目的に応じて移動することによって、

自然と主体性が生まれる仕組みなのだ。

また各教科の教室の横にはミニ図書館(図書コーナー)が設

置されている。例えば「理科」の教室の横には理科の資料や図鑑が並び、「これについて知りたい」と思ったら、すぐに手にとって調べられるようになっている。

小学部部長の菅野勝治郎先生(写真)に、教育環境と個性について伺った。「教育には環境が大切ですが、中でも人的環境が最も重要です。子どもの個性や資質を光らせるためには、教師がそれを見抜く力を持ってないといけません。ここでは全ての先生が力量と使命感を持っていますし、教師同士もお互い尊重し合いながら、切磋琢磨しています。教師間のネットワークは非常に密で、より良い教育を実現する為には、労を惜しまず、情報交換や助言しあいます。また学校の年間カリキュラムは決まっていますが、実践は教師のアイディア勝負。教師も日々知恵を絞っています」。



『進みつつある教師のみ人を教える権利あり』とは、玉川学園の創立以来の理念だそう。つまり、教師として完成形はなく、常に試行錯誤、創意工夫を忘れないことこそ教師たるべき人間のつとめである、という考え方である。プロフェッショナルとは、決して完成した形ではなく、先へ先へと進もうとする姿勢を指すのかもしれない。

本物を与え、本物で鍛える

菅野先生は昨今の「個性重視教育」の考え方に一石を投じる。「巷で言われる『個性重視の教育』は、どこか「個性」の意味が表面的にしか理解されていない面があります。『学校では自由に、好きなことを伸び伸びやりなさい』では、子どもは伸びません。『〇〇が得意だから、〇〇だけ頑張ればいい』ではなく、不得意なものでも、それに誠実に取り組み乗り越える過程で、忍耐力や創意工夫の力などが生まれます。不得手なものが少しでも伸びた時にこそ個性は磨かれ、それと同時に得意なものもさらに伸びてゆくのです。」

一見、自由に見える校風だが、その根底には個性を真に生かすための厳しい基礎教育が存在していた。「本物を与え、本物で鍛えることが大切」という菅野先生の言葉が、まさしく教育の原点を物語っていた。



自由研究の吹奏楽クラス

5. 先生の自己研鑽は、 生徒の個性化につながる

～先生は生徒と一緒に育つ、という考え方

「指導者」としての完成形はありません。子供の数だけある個性、それらと向き合うためには、先生も一緒に成長していく姿が望ましいでしょう。

「目利き、耳利き」の指導者へ

村澤 由利子先生（当協会音楽大学代表
連絡委員会アソシエイト）



自由に弾かせるのも大切ですが、個性とはき違えないようにするには、指導者側の実力、音楽性、判断力を常に養うことが必要でしょう。外国でのコンサートで聴きに行って全く違う表現力を目の当たりにしたり、違うピアノの音色を知ること大切です。今年の8月にドイツで、スタインウェイピアノの10倍近い値段のイタリー製のピアノ「ファツィオリ」を用いた、バッハのコンサートに行ったのですが、初めて聴くピアノの音色にとっても感激しました。こうした体験は、常に新しい気づきをもたらしてくれます。生徒にも同様の体験を積んでほしいと思います。生徒と一緒にコンサートに行ったりもしておりますが、やはりその次のレッスンから、音楽の作り方、感じ方が変化することがあります。

様々な音楽を知ってもらう為に、生徒には普段からCDを沢山聴くことを勧めています。その時、必ず「どのピアニストが何歳の時に録音したCD」かを意識させるようにしています。何も言わないとCDを1枚しか買わないケースが多いのです

が、それだと演奏家による奏法や解釈、音楽の作り方の違いが分かりません。ですから自分のCDや演奏と聴き比べてもらうことによって、まずは音楽の「違い」を感じ取ってもらうようにしています。そこから、「自分はこう演奏したい」という意識を持ってもらえればと思います。

その生徒に最適な「音楽との関わり」を教える

池田 由美子先生（当協会国際委員）



個性を伸ばす教育をするにはまず教える側にしっかりとした信念と、責任をとるだけの心構えが求められます。私がこれまでに出会い尊敬する数々のピアノ教師の素晴らしいと感服した点は、日々の絶え間ない努力、そして受け入れる度量の大きさと、音楽に対する知識が「生きている図書館」と思えるほど膨大であったことです。色々なタイプのピアニストの音を知り、あらゆるジャンルの芸術にも精通し、さらに生徒の本来持っている資質を見抜き、決して無理をさせることなく、「一人一人に最も相応しいと思える音楽との関わり方」を教えているのです。

まず自分に厳しく、そして生徒と共に時代を歩んでいるという彼らの態度は、私自身が彼らの年

齢を経験するようになって改めて胸に迫る重さを感じています。

教える人間として「何故自分自身がこの仕事を選び、どういう風に生徒を育てていきたいのか」を常に自問自答すれば、答えは自ずと導き出されると考えています。

先生の「自分磨き」、生徒にも伝わる

平嶋 由美子先生（当協会指導者会員）

一教えるのには、百の知識が必要。ですから私達指導者も、様々な指導書を読んだり教材を研究するなど、可能な限り努力するよう努めています。



しかしそれ以上に、生徒と一緒に学んでいく姿

勢が重要、と考えるようになりました。子育て中は時々セミナーに通ったり、講師演奏などしていましたが、知らぬうちに段々世界を狭くしていました。しかし、指導者検定を受けた後それに気づかされ、外に目を向けて自分を向上させることが大切だと分かりました。それが生徒に伝わったのか、「自分はこういう風に弾きたい」と生徒自ら意欲的に取り組むようになりました。

表現の自由が個性とは考えておりますが、それが人に伝わっていなければ演奏は成り立ちません。曲にあったテンポ、作曲家の気持ち（楽譜に記されている音、長さ、記号）のルールを守れることを、必要に応じて生徒に話します。自分自身が演奏活動をする時、特に未就学児を対象にすると顕著に反応がわかるので、私にとっても良い勉強になりますし、それを生徒に伝えることの重要性を再認識させられるこの頃です。

ピティナっ子の個性3 ～個性は進化する

高木早苗さん（ピアノ・トリニテ）



そもそも私は、学生時代にあまり先生方から「こういう曲が向いている」とか「あなたの持ち味はこれ」と言われたことがほとんどありませんでした。同級生たちがそう言われた、と聞くと羨ましく思っていたものです。でも今になって思うと、私の場合「自分で考える」きっかけをレッスンで頂いてくるが多かったように感じます。これは「個性は自分で気づき、育てるもの」というメッセージだったのだと思います。このことを意識して考えるようになったのは、ドイツ留学をした辺りからでした。そして自分で「考える」力こそ「個性」を創る、という思いはさらに強くなってきています。

私は他の人の演奏を聴くと、その人がどう生きたいと考えているか、何を美しいと感じているか、ということが楽譜への丁寧なアプローチによって一体化しているとき「個性」を感じます。闇雲に「我」を出す演奏は、聴いていてあまり居心地のいいものではありません。作曲家のメッセージをひとつでも

多く読み取りたい、という日々の地道な追求なくして本当の「個性」は出てこないように感じます。そうやって紡ぎだされた「個性」は、人間の本能をくすぐってくれる最高のもののように思うのです。その人は世の中にその人だけ。その唯一の内なる声に耳を傾けることが「個性」なのでは、と考えています。

「ピアノ・トリニテ」で活動するようになってから、コンサートをしたり様々な人の意見を聞くことが刺激となって、自分の方向性や価値観、美意識に一層アンテナを張ることが多くなりました。そして、まだまだ自分の知らない感覚がいっぱいあることに気づかされます。自分の弱さと戦いながら、一瞬一瞬を大切に生きることによってそれらを見つけ磨いて、作曲家のメッセージを謙虚に、より深く読み取ることができればと願っています。そして演奏時に思わず出てしまう「我」が、いつの日か無くなっていったら…と思っています。

6. 個性を磨くチャンスをもく持つために

～深く掘り下げる勉強は、個性を際立たせる

コンクールやステップは、結果だけを求めるものではなく、楽曲を深く掘り下げ、表現方法を模索し、そして人にその思いを伝えるというプロセスを経験する場です。その過程で、個性は少しずつ磨かれてくるのです。また日々のレッスンや日常生活の中等、きっかけはすぐそこに。

コンペは自己探求する場

古賀 未加緒先生 (当協会正会員)

津島圭佑さん(2003 年度 G 級決勝進出・第 1 回福田靖子賞ベストレッスン賞)は、音楽に対する憧れや情熱が強いので、アドバイスを素直に聞き入れることができる、というのが彼の個性だと思います。



色々な演奏を聴いて自分の演奏の参考にするというよりは、誠実に楽譜から感じ取ろうと努めています。イメージネーションが沸きやすい曲は、最初から自分なりに「こう弾きたい」というイメージがありますが、そうでない場合は私から考えるヒントになる言葉を言います。決して「こう弾きなさい」とは言わないように気をつけています。自分の弾きたい音楽がピアノに反映されるように、ちょっとした指の使い方等、助言を与えることもあります。藤澤克江先生のご指導により、常に将来を見据えた勉強をしています。

専門的に勉強したい生徒の場合、コンペティションという機会を利用しながら、通るだけでなく、その生徒の年齢、性格、環境などの条件の中で、1つの曲を深く感じ取り、音に表すことを、今の限界と思われるところまで勉強してもらっています。その結果、その時点で何が足りないか見えてきて、逆に自分自身の個性を自覚することになります。

私の生徒の場合は、「個性豊かな演奏」にたどりつく前に、「誠実に表現しようと努力」することを大切にしています。ニュアンスによる音の違いを感じ取る能力や、音楽と自分の感情を一体化させようとする能力を感じさせる生徒は、多様な個性の中の一つだと感じます。

グループレッスンで「人と何が違うのか」考える

久保山 千可子先生 (当協会正会員)

幼児期から児童期にかけては、皆全く同じ教材、一定のメニューを使います。なぜなら個人のほかにグループレッスンのよさを最大に利用したいと思うからです。集団の中での自分の位置を知ること、また協調、協力といったカラーを皆で合わせることもしたいのです。すなわち、グループの中でいかに自分を出すかも含め、自分が人とどこが違うのか、あるいは同じなのかをまず知った上で、「人」というものについて考えさせることが大切だと思います。ピアノを弾く個性について、自分達で考えていけるような子供に育ってほしいと思います。そのために、先生の前ではフランクに自分を出せる付き合いを、普段から心がけています。



子供は家庭環境に左右されて生きているので、小さいうちは「特徴＝親の姿」のようにも映りま

すが、それを超えて飛び出してくる本人にしかないものを見た時に、「個性が豊かだな」と思われます。そうした鋭い感性や感覚を鈍らせないよう、指導者として個性の豊かな自分でありたいと思います。

社会にも目を向け、日常生活の中で個性を育てる



福留 真楠先生 (当協会正会員)

作品に対して、自分自身の主張をはっきり伝え

られる奏者は、個性ある演奏と思います。本来個性とはピアノで育むものではなく、日常生活から形成されるものと考えます。社会で起きている様々な出来事に常に関心を持ち、それに対して考えることから始まります。

日本では昔から思想や理念を語ることをタブー視している傾向があります。しかしベートーヴェンやショパン等は、社会に対して大変敏感でした。社会で起こる様々な事件で出来事を無視しては、本当の意味で作品を理解した個性ある演奏はできないと思います。

変化する個性に寄り添う教育とは

武田 真理先生 (当協会評議員)



私は8月25日トッパンホールで行われた、ピティナC級決勝大会の総評で、「皆個性的な音楽だった」と評しました。そこで云った個性の意味は、過去にコンペティションに出場した多くの

子供達のような、教師にいじくり回された音楽や、従来の定型的な演奏ではなく、自由に伸び伸びとした演奏であったといった意味の個性です。

しかし、「個性を伸ばす音楽教育」となると、正直、私にはよくわからないのです。ピアノを教えるようになって30余年になります。その中には、4～5歳当時から教えて、現在ピアニストとして活躍している人もいますが、個々がもつ個性とは、どういったものなのかよくわからないのです。

私より40歳も若い子供達が見ている現代と、私の個が形成されたであろう長い年月の間に、私が培ってきた音楽に、時にはズレが起こり、毒となって若い才能の芽を摘んでいるのでは、との疑問を持つ事もしばしばです。

長い間ピアノを教えていますと、ハッとするような音を出す子供と出会います。でもその音が果たして個性的な音楽として発展していくかというと、そうでもなかったりするのです。では、個性を伸ばす教育とはどんな教育なのでしょう。

一つの曲を弾くには、ある程度の技術がなければ、どんなに感性豊かな人でも弾くことはできません。かといってどんなに優れた技術をもっていても、感情が氷のようでは音は響きません。私たち指導

者は、ある程度の技術は教えることができますが、感情表現となると、抽象的な表現でしか伝える事ができないのです。そもそも感性といわれるものは、教えることではなく、本来育てていくものなのではないでしょうか。

ちょうど多くの知識が積み重なり智恵に変わっていくように、個性といったものも感性の積み重ねのなかで芽生えて、素晴らしい音色となってあふれ出るのでしょうか。私たちにできることは、感性の道順を示してやる道標といったものなのでしょうか。

私が高校生だったころ、ビートルズが日本に来ました。武道館で公演をし、多くの日本中の若者が熱狂しました。でも、そのとき大人たちの多くは、不良の音楽と云って、ビートルズを聴くことも、歌うことさえ蔑視の眼でみていました。それから二十数年後には、ビートルズナンバーが、中学生の音楽教科書に載るようになりました。不良の音楽が音楽教育に取り入れられたのです。

指導者は既成のクラシック音楽という枠の中だけで、若い音楽家のタマゴ達を閉じこめてはなりません。過去の歴史が示してきたように、新たな個性が新しい時代をきり拓いて来た事を、思い起こさなければなりません。私自身においては音楽教育に疑問をもち、常に試行錯誤しながら、これからも皆さんと接していくつもりです。

最後に、アインシュタインが云っています。

「教育とは、学校で習ったことをすべて忘れた後に、残っているところのものです」と。(筑摩哲学の森より)

海外では、個性をどう捉えている？～ドイツ編

新井眞澄先生
(ベルリン芸術大学教授)



個性という言葉は本来どんな意味があるかを考えてみると、ドイツ語では Persönlichkeit という言葉があてはまります。演奏を聴いて「個性があった」と言う場合には、それは面白かった、とか生き生きしていたという意味で使うことが多いようです。「個性的だ」と言うときは、一寸変わった演奏だとか、人にな魅力があるといった意味を持っています。

個性がある方が無いより良いと誰でも思うだろうし、それではどういう成り立ちで個性ある演奏が生まれるのか？という疑問が出てきます。

生まれつきの性格と気質をもった人間の特性が演奏に生かされ、その表現に必要な演奏のテクニックを身につけて、音楽的教養を持った演奏家ということではないでしょうか？それが個性ある演奏家だと言

うことであるのなら、音楽的文法を守り、先生から指示されるだけでなく、自分で楽譜に書いてあることを実現させることが、まず第一に必要条件となります。その意味ではテンポ、デュナーミックについても、ことさら人の注意をひくような、奇異をてらった解釈は好ましくないということになります。

次に大事なことは、その人のパーソナリティ、すなわち人格を持った教養あふれた演奏解釈を持つということで、それらが一体となって表現として外に出てきた時、その人の持っている個性ある音楽と言えるのではないのでしょうか・

それには、音楽以外の芸術一般に興味を向け、又、心と体を鍛えることも欠かせません。

そして、さらに又、人生において、色々な経験を積み、消化していくことを着実に積み重ねている人へののみ、本当の個性がひかった演奏があるのではないのでしょうか？

手探りで見つけた指導法

～同じ兄弟でもこんなに違う！

佐藤由有子先生 (当協会正会員)

「個性」それはひとりひとりの内側に潜んでいる色とりどりの宝物。限られたレッスン時間の中で、少しでもその個性を見つけ出し、引き出してあげられるよう工夫して教えることが音楽教師の役割だと思います。

幼稚園児の頃から指導してきた3人兄弟で、今は揃って大学生になっている生徒たちがいます。その兄弟は3人3様、それぞれに個性豊かです。長男は真面目で言われたことに対してきちんと向き合うタイプ。長女はとても要領がよく、そして次男はいやな事はしない、好きな事はとことんやり抜くタイプです。

次男が小2の時の出来事です。お母様がレッスン室の玄関で土下座して「お願いやから、お兄ちゃんみたいなハノンやチェルニーは飛ばしてください！」と言われたことがあります。

当時、まだ教師駆け出しで若かった私は、さてこの次男に何を教えたら言いのだろう、と頭を抱えました。他の兄弟にはない彼ならではの持ち味は、和音に敏感だったこと、リズムのある曲が好きだったことでした(お父さんとジャズを聴きに行ったりするような小学生でした)。それなら、その得意なと

ころを引き出す方法を考えよう！と試行錯誤の結果、彼用のカリキュラムを立てることにしました。

簡単な伴奏付けや変奏から始め、CDコピーをしてみたり、即興で連弾をしてみたり…。他の生徒のレッスンとは一味違う楽しさを、私も経験することが出来ました。

高1の時の発表会には、彼の計画通り10ヶ月かけて、あるジャズのCDコピーをして譜面を起こし、その曲を演奏してくれました。会場のお客さんも大喜び。本人にも聴衆にも思い出の1曲になったはずです。あれから5年も経ち大学生になった今でも、レッスンの合間にその曲をぼろりと弾いてくれたりします。身体にしみこんでいるのでしょう。

ハノンもチェルニーも途中で止めてしまったけれど、彼の中にはピアノで遊べるという財産ができたと思います。社会に出てからも、きっと一生音楽を楽しめることと思います。

型破りでも、その生徒に合うと思われる指導法は、勇気をもってどんどん取り入れてみることに。これは私が彼から学んだ、個性を伸ばす教育方法です。

●アンケート協力者一覧 (敬称略・五十音順)

※「個性とは〇〇である」に対する回答をご紹介します。

秋葉 恭子 (茨城県結城郡) 自分らしさ、独創性
厚地 とみ子 (熊本県熊本市) その子を見出す魅力
伊井 光子 (愛知県愛知郡) その人、そのもの
飯島 弘雄 (埼玉県川越市) 品格
池尻 明子 (茨城県守谷市) 人間的な性格そのもの
池田 寿美子 (兵庫県西宮市) 規律の中で秀でること
池田 奈甫子 (茨城県上浦市) 総ての人間が所有しているもの
池田 由美子 (兵庫県西宮市) 作曲者がこう考えているであらうという自分の解釈を主張できる
石井 なをみ (兵庫県西宮市) 「自己表現」「世界で1つ」
石黒 加須美 (愛知県一宮市) その人からにじみ出る
石橋 佳子 (東京都西東京市) 思考力や想像力
伊藤 順子 (愛知県犬山市) 感性である
伊藤 裕子 (福岡県北九州市) 人間の心と結びついている演奏
伊藤 優子 (愛知県愛知郡) 大変重要な素質
稲垣 千賀子 (兵庫県川西市) 生徒自身のメッセージ
梅本 好子 (静岡県伊東市) 揺るぎない基礎力の上に立つ表現
漆原 光美 (宮崎県宮崎市) その子そのもの、その人らしさ
江口 奈々子 (福岡県久留米市) 一人一人の持っている
遠藤 操 (千葉県東葛飾郡) 感受性、創造性等
大林 裕子 (愛知県名古屋市) ONLY ONEである
大山 まり (鹿児島県指宿市) 自己主張の強さ、他人の言
緒方 恵美 (福岡県飯塚市) 動を受け入れる気持ちの幅
小川 せつ子 (愛知県名古屋市) の大きさ
奥村 真 (愛知県名古屋市) 本能である
小佐野 圭 (東京都国分寺市) 人になら自分だけのもの
小原 祥代 (東京都港区) 飾らないこと
金丸 安子 (香川県丸亀市) 創意である
壁谷 文男 (東京都板橋区) 存在そのもの
久志本 優子 (三重県津市) 生命の輝きである
國谷 聖香 (北海道札幌市) ポテンシャル
久保山 千可子 (福岡県福岡市) 世代間のギャップを早く
古賀 未加緒 (福岡県北九州市) 脱出し、自分を創ること
後藤 美知子 (東京都港区) 全ての人がもつ輝き
佐藤 三津子 (北海道北見市) 創造力である
佐藤 由有子 (兵庫県神戸市) その本人にしかない特徴
佐藤 祐子 (神奈川県横浜市) 教育により磨かれた感性の表現
篠原 愛子 (北海道札幌市) 自然に育つものを大切に
島崎 清 (京都府京都市) 練磨の向こうにある音楽を
下山 博子 (東京都世田谷区) 愛する心
杉谷 昭子 (東京都葛飾区) 一人ひとりの内側に潜んで
住田 智子 (島根県江津市) いる色とりどりの宝物
高木 紀子 (東京都練馬区) 感性
高安 かおり (神奈川県川崎市) 音楽性豊かな子の各々の音楽性
才能ある人が努力して磨くもの
才能
芸術である
世界に一つだけの花
才能や天分ではない。その
芽を十分に育てる使命を
指導者は担っている
自由

多喜 靖美 (東京都八王子市) 人格である
瀧澤 淳子 (千葉県千葉市) 自分自身であること
滝本 哲也 (東京都豊島区) 品性である
武田 宏子 (香川県高松市) 自分の意思である
立松 佐喜子 (京都府京都市) ピアノに対する情熱
田中 巳穂 (兵庫県神戸市) 自発性の形
丹内 真弓 (東京都豊島区) 色々な情報や経験から自分の考えをまとめる力
常盤 江里奈 (静岡県浜松市) 表現意欲
都甲 泰代 (長崎県北松浦郡) 他人には無い長所
輿 みゆき (山口県宇部市) その人の存在そのもの
中倉 のり子 (神奈川県横浜市の) 意欲
中路 真由美 (東京都東久留米市) 自己表現である
中島 昌子 (東京都国分寺市) 人格とつながったところの
各人の特質である
中村 真代子 (静岡県湖西市) 創造とモラル
西尾 学 (愛知県刈谷市) 音楽が好きで好奇心が旺盛
であること
濱本 麻里 (熊本県熊本市) 音楽性である
林 苑子 (東京都文京区) 夢に向かって自らの可能性
を伸ばす能力
平嶋 裕美子 (埼玉県草加市) ルールをふまえての自由な発想
平間 百合子 (宮城県仙台市) 生き方である
福留 真循 (滋賀県近江八幡市) 作品に対して自分自身の
主張をはっきり伝えられる奏者
藤田 純子 (大分県別府市) 誰もがもっている秘密の小箱
振本 有紀 (京都府京都市) 人間性
保科 礼子 (兵庫県神戸市) 人柄
前田 由美 (山梨県中巨摩郡) 一人一人の魅力
松尾 英美 (東京都世田谷区) 人格である
松原 彩子 (宮城県黒川郡) 思考
松本 明 (埼玉県所沢市) 自発性
水村 浩一 (愛知県名古屋市の) 自らの感覚と創意をもって
表現に結びつけることができ
る能力
輝き
三谷 知子 (広島県福山市) 輝き
南 晶子 (大阪府三島郡) 個人の最も自信の持てる部分
宮城 佳代子 (沖縄県那覇市) 人をひきつける魅力
宮村 京子 (宮城県宮崎市の) 生まれ持つ内なる自己主張
三好 のび子 (静岡県藤枝市の) 自然体の美しさ
三次 裕子 (神奈川県横浜市の) 個性とは右脳教育である
村上 隆 (東京都八王子市の) 表現
村澤 由利子 (徳島県鳴門市の) 自分らしさ
杜 慶子 (大阪府茨木市の) 持ち味
森島 英子 (山梨県北巨摩郡) アイデンティティーである
矢幅 寿美 (岩手県久慈市の) 耳、心、能力の結集である
山内 るり (高知県高知市の) 性格
山田 桂子 (千葉県船橋市の) 他人にはないもので聴いている
山田 真治 (愛知県犬山市の) 人を魅了させてくれるもの
山田 つづみ (三重県津市の) 特質、精神
山脇 直子 (島根県浜田市の) 永遠にのびていける心の長所
湯本早百合 (埼玉県さいたま市の) 感性
由良 佳久 (千葉県千葉市の) あるがまま
横山 佳枝 (大阪府高槻市の) 表現力
吉岡 明代 (徳島県徳島市の) 資質、特質

※アンケートへのご協力誠にありがとうございました。

エピローグ

「個性ある演奏」はその人自身の思考や感情が、理にかなった音楽的解釈をともなって表われる演奏です。ですから個性を発揮するためには、まず土台作り、すなわち指や腕の正しい使い方、音楽的な解釈の仕方、感性を表現に結びつける技術、響きを作る力などが不可欠です。こういった基礎訓練の先に、少しずつその人のオリジナルな感性や考え方がにじみ出てくる、これが「個性」といえるでしょう。

個性が磨かれる時期は、人によって個人差があります。なぜならそれは各個人の「内なる気づき」から始まるものだから。そこに至るまで、一つずつ必要なことを積み上げてあげながら、「気づき」のきっかけを作ること。これが指導者の役割なのかもしれません。(取材・構成◎菅野恵理子)